

三 条 大 橋

400年の風雪に耐えて
緑青が鈍く輝く



●「弥次さん、喜多さん」の銅像



●三條大橋のシンボル「擬宝珠」

●現在の三條大橋

京都の市中を南北に流れる鴨川。今回は、その鴨川にかかる橋の中では最も人々に親しまれている三條大橋を紹介します。

きれいに整備された河原にはジョギングや散歩を楽しむ人の姿や護岸に語らうカップルの姿、初夏には鮎釣りを楽しむ人の姿も見ることができます。そこは、京都という都市に残された貴重なオープンエア。市民の共有財産とも言うべき大切な自然のひとつです。

一方で三條大橋は、幹線道路を守る人間と繰り返される洪水との戦いのシンボルでもあります。そして歴史的な重要度という点からも、近畿の代表的な土木遺産に数えられています。

東海道の西の起点 原型は秀吉の命によるもの

京都の市中を東西に貫く三條通りはかつての三條大路、今も昔も変わらない京都のメインストリートです。鴨川を越えての行き来も盛んに行われ、室町時代にはすでに同じ位置に三條大橋が架かっていたと推測されています。

現在の三條大橋の原型となったのは、天正18年(1590年)に豊臣秀吉が増田長盛に命じて架橋させたものとされています。織田信長が推し進めた道橋政策を継承した秀吉が大坂の町づくりを終え、満を持して京都・聚楽第の造営とそれに伴う都市整備に乗り出した際の架橋でした。このような強固な長大橋の架設は、強力な支配権があって初めて可能になると言われますが、立派な橋の造営は京の市中に秀

吉の時代が到来したことを知らせたに違いありません。

現在、三條大橋のシンボルとなっている擬宝珠が橋の高欄を飾ったのもこの時。現在に引き継がれたその擬宝珠には、天正の工事の様子が「磐石の礎地に入ること五尋」^{※1}と刻まれ、洪水に備えての万全を期したことが強調されています。しかし、自然の猛威はやはり人智の及ぶところではなく、その後も大洪水との戦いは幾度となく続き、昭和25年(1950年)には現在の橋に架け替えられることとなりました。

橋の長さは73m、幅員15.5m。新しい橋脚は基本的には鉄筋コンクリート柱で造られていますが、最下流側の橋柱には今も石柱が使われ、「日本で最初の石橋」^{※2}といわれた名残を留めています。また、側方には木製の桁隠しを取り付けられ、高欄には檜材が、その上には天正以来の擬宝珠が乗り、京都の橋を代表するにふさわしい意匠とな

っています。

江戸時代には東海道五十三次の西の起点とされ、京ばかりか、全国にその名が知られていた三條大橋。橋の西詰に建つ「弥次さん、喜多さん」の銅像がそんな往時の名残を今に留めています。

※1 約9m。やや誇張した表現とされる

※2 擬宝珠の銘に記されている

丸い擬宝珠は 公儀橋の証

三條大橋に限らず、擬宝珠が橋の意匠の重要なポイントとなっている例は少なくありません。しかし、この擬宝珠、どんな橋にも取り付けてよいというものではなかったと言われます。

取り付けてよいのはお上が架ける公儀橋のみ。単なるデザインではなく、橋の格付けを表す一種のシンボルだったというわけです。

よく知られるように、江戸時代以前の橋には幕府が管理する公儀橋と町人が管理する町橋の二つがあり、主要な街道の起点となるなど重要性の高い橋は公儀橋に、富裕な町人たちが必要に応じて（私財を投じて）架橋するものを町橋として認めていました。これは、元来、橋を架けるという作業がまちづくりの根幹であり、軍備上の重要事項であったこと、財政上の負担を軽減したいという幕府の思惑があったこと。擬宝珠を冠した公儀橋を数えると、江戸市中では日本橋・京橋・新橋の三橋、京都の市中では五条大橋とこの三条大橋の二橋だけでした。

三条大橋の擬宝珠は、大小12基。1基は昭和25年の洪水の際に紛失しましたが残りの11基は天正時代のものが今もそのまま使われています。元禄、明治、大正、昭和と幾度にも及ぶ改修工事を経ながら、400年間変わることなく橋上から京都の歴史を見守り続ける擬宝珠は、やはり三条大橋のシンボルと呼ぶにふさわしい風格を有しています。

暮らしに息づく鴨川の橋として

今は穏やかに見える鴨川の流れも、かつてはたびたび氾濫を起こす危険な河川でした。その昔、一度ならず二度も天皇の位に就き、天下を我が者顔で支配した白河法皇をして「鴨川の水と、双六の賽、山法師だけは私の思い通りにならない。」（『平家物語』）と言わしめたのは有名な話です。

為政者にとって、鴨川の管理は都を治めるうえでの重要事項であったに違いありませんが、その対策は秀吉の時代同様、架橋や橋の改修に費やされ、川そのものは、昭和になるまでほとんど変わることがありませんでした。

現在の橋を架ける直接の引き金となったのは昭和10年（1935年）6月に起こった大洪水。この時、京都市内の主要な橋で流失した橋は74にも及び、鴨川でも三条大橋をはじめ20の橋が流失したり、大破したと伝えられています。

しかし、この洪水をきっかけとして永久橋と河川改修の必要性があらためて認識され、鴨川でも昭和18年（1943年）



●東海道五拾三次／京都三條大橋錦絵（国立国会図書館／貴重書検索 www3.ndl.go.jp）

橋の上と下に分かれて 想いを交わす 幕末の恋



●幾松



●桂小五郎（木戸孝允）

現在の様子からは想像できませんが、かつて三条河原は合戦や処刑の場とされ、血生ぐさい話題にも事欠きません。しかし、そんな三条大橋にも幕末のラブストーリーが秘められています。

男は討幕運動のリーダーとして名を馳せた長州藩の桂小五郎（後の木戸孝允）。元治元年（1864年）6月、池田屋騒動での難を何とか逃れた桂小五郎は、大橋の下に身を隠して新撰組の追及を避けていました。桂の恋人であった芸妓・幾松は、行方の知れなくなった桂を求めて京都中を探し、ある晩、大橋のたもとの片隅で焚き火にあたる人影に目を留めます。じゅばん一枚にほうかむり姿に身をやつした姿…。もしやと思って目を凝らすと、それは間違いなく恋人の桂でした。二人は涙を流さなばかりに抱き合っ、再会を喜びました。以来、幾松は毎夜橋の上に立ち、辺りの景色を眺めるふりをして着物から食料や同志からの手紙を橋の下にいる桂に落としたと伝えられています。



●国の有形登録文化財指定 旅館「幾松」

幾松については、長州藩の控え屋敷に新撰組が押し入った際、長持ち（着物などを入れる箱）に桂を隠し、機転を利かせて急場を救ったというエピソードも有名です。旅館「幾松」^{※3}に残る写真からもわかるように、可愛い中にも知性を兼ね備えた芯のある女性だったのに違いありません。

※3 長州藩控え屋敷がその後旅館「幾松」に転用され、現在に至る。（資料提供：「幾松」）

に河床を大きく掘り下げる河川工事が行われました。戦後から4年を経た昭和24年（1949年）、三条大橋はようやく着工され、8か月後の翌年4月に無事竣工しました。

その後約半世紀、周辺の整備も着々と進み、人々から親しまれる鴨川のシンボルとして京都市民の暮らしを支えています。

●参考資料：『京の機ものがたり』松村 博著
『京の鴨川と橋 その歴史と生活』門脇貞二・朝尾直弘共編
国立国会図書館

